

組み合わせ範疇文法 (CCG) による 日本語の敬語表現の分析に向けて

渡辺 成美¹

戸次 大介^{1,2,3}

1) お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

2) 国立情報学研究所

3) 独立行政法人科学技術振興機構、CREST

{watanabe.narumi, bekki}@is.ocha.ac.jp

1 背景

日本語の各敬語表現には、どのような状況下で使えるかという使用条件がある。そしてこれらは戸次 (2008) [1] のように意味論的前提 (presupposition) もしくは慣習的含み (conventional implicature) として定式化し得ると考えられる。日本語文法の記述体系として、戸次 (2010) [2] は組み合わせ範疇文法 (Combinatory Categorical Grammar、以下 CCG) と動的意味論による分析を与えた。本稿では、その拡張として日本語の敬語表現のための統語素性と語彙項目を提案する。戸次 (2008)[1] では敬語を含む待遇表現の意味表示を与えているが、「お」「ご」等の接頭語、「になる」「する」のような活用語尾の分解までは示されていない。本論文では、その課題を解決するとともに、主な敬語表現に統語範疇を割り当て、意味論についての考察も行う。

なお、敬語を分析するにあたり、文化審議会 (2007) [3] に基づき敬語を表 1 のように分類する¹。

2 CCG

本研究では文法記述の枠組みとして CCG を用いる (Steedman [4]、戸次 [2])。CCG は語彙化文法であり、組み合わせ規則と語彙項目からなる。規則のうち主要なものを抜粋したものが図 1 である。また \$ 記法と呼ばれる略記法を用いる。X/\$ は X、X/Y、X/Y/Z、...、X/\$ は X\Y、X\Y\Z、... といった統語範疇を一般化して表したものである。

分類	上位	下位	例
尊敬語	ガ格名詞句	話者	お帰りになる、仰る
謙譲語	ニ・ヲ格名詞句	ガ格名詞句、話者	お待ちする、申し上げる
丁寧語	聞き手	話者、ガ格名詞句	いたす、申す
丁寧語 美化語	聞き手	話者	です、ます お菓子、ご飯

表 1: 敬語の分類

(順・逆関数適用規則)	$\frac{X/Y \quad Y:a}{X:fa} >$	$\frac{Y:a \quad X\backslash Y:f}{X:fa} <$
((順・逆)関数合成規則)	$\frac{X/Y:f \quad Y/Z:g}{X/Z:\lambda x.f(gx)} >^B$	$\frac{Y\backslash Z:g \quad X\backslash Y:f}{X\backslash Z:\lambda x.f(gx)} <^B$
(等位接続規則)	$\frac{X:f_1 \dots CONJ:\circ \quad X:f_m <\Phi>}{X:\lambda \vec{x}.(f_1 \vec{x}) \circ \dots \circ (f_m \vec{x})} <$ ただし $1 < m$	

図 1: CCG の規則

3 敬語の統語的分析

各敬語表現に語彙項目を与えるにあたり、意味表示の当面の手段として、命題 $sonkei(\phi)$ 、 $kenjo(\phi)$ 、 $teityo(\phi)$ 、 $teinei(\phi)$ を使う。これらは引数として命題をとり、その命題がそれぞれ尊敬語、謙譲語、丁寧語、丁寧語の形であることを表す。後に各敬語表現が高める/低める対象について考察する。

3.1 動詞につく「お」「ご」

敬語全体に関わるものとして、まず「お」「ご」の語彙項目を与える。

¹ 「謙譲語」「丁寧語」はそれぞれ「謙譲語 A」「謙譲語 B」と呼ばれることもある

(11) 「お/ご - する」

し $\vdash S_{\text{neg} | \text{cont} | \text{euph}:t} \quad \backslash NP_{ga} \backslash \$ \backslash (S_{\text{hon}} \backslash NP_{ga} \backslash \$)$
 $: \lambda P \lambda \bar{x} \lambda x \lambda e. \text{kenjo}(Px\bar{x}e)$

する $\vdash S_{\text{term} | \text{attr}} \quad \backslash NP_{ga} \backslash \$ \backslash (S_{\text{hon}} \backslash NP_{ga} \backslash \$)$
 $: \lambda P \lambda \bar{x} \lambda x \lambda e. \text{kenjo}(Px\bar{x}e)$
 ... (以下サ変と同様に活用する)

(12) 「お/ご - 申し上げる」

申し上げ $\vdash S_{\text{stem}} \quad \backslash NP_{ga} \backslash \$ \backslash (S_{\text{hon}} \backslash NP_{ga} \backslash \$)$
 $: \lambda P \lambda \bar{x} \lambda x \lambda e. \text{kenjo}(Px\bar{x}e)$

3.4 丁寧語

「- いたす」はサ変語幹とのみ結合する。「お/ご - いたす」にはサ変以外のものとも結合し、よって敬語語幹と接続するものと考えられる。

(13) 「- いたす」

いた $\vdash S_{\text{stem}} \quad \backslash S_{\text{stem}} \quad \backslash (S_{\text{hon}} \backslash \$)$: $\lambda P \lambda x \lambda e. \text{teityo}(Pxe)$
 いた $\vdash S_{\text{stem}} \quad \backslash S_{\text{stem}} \quad \backslash (S_{\text{hon}} \backslash \$)$: $\lambda P \lambda x \lambda e. \text{teityo}(Pxe)$

3.5 丁寧語

戸次 [2] において、丁寧語は統語素性 +P を持つ。ここではさらに意味論においても丁寧語であることを表すことにする。

(14) 「です」「ます」

ます $\vdash S_{\text{term} | \text{attr}} \quad \backslash S_{\text{cont}} \quad \backslash (S_{\text{hon}} \backslash \$)$: $\lambda P \lambda e. \text{teinei}(Pe)$
 です $\vdash S_{\text{term} | \text{attr}} \quad \backslash S_{\text{stem}} \quad \backslash (S_{\text{hon}} \backslash \$)$: $\lambda P \lambda e. \text{teinei}(Pe)$

(15) 「- ございます」

ございます $\vdash S_{\text{term} | \text{attr}} \quad \backslash NP_{ga} : \lambda P \lambda e. \text{teinei}(Pe)$
 ございます $\vdash S_{\text{term} | \text{attr}} \quad \backslash S_{\text{stem}} : \lambda P \lambda e. \text{teinei}(Pe)$
 ございます $\vdash S_{\text{term} | \text{attr}} \quad \backslash S_{\text{cont}} \quad \backslash (S_{\text{hon}} \backslash \$) : \lambda P \lambda e. \text{teinei}(Pe)$
 ...

4 制限のある敬語表現

以上、主な敬語表現について語彙項目を割り当てたが、これらのみでは説明できない現象が存在する。以下のような動詞には敬語化にあたり制限がある。(a) 語幹が一音節の動詞、(b) 外来語・擬態語・擬音語、(c) 悪い意味を持つ動詞、(d) 特定の言い換えがある動詞、(e) その他慣習的に一部の尊敬語・謙譲語の形にできない動詞、などがある。

- (16) a.*先生がお来になる。
 b.*先生がおスケッチになる。
 c.*先生がご失敗になる。
 d.*先生が本をくれられる。
 e.*先生がご水泳になる。

(16a) は、「来る」の語幹が一音節であるために「お/ご - になる」などの形にならないという例である。「来る」を尊敬語にするときは「いらっしゃる」を用いる。ただし「来なさる」「来られる」は用いられる。(16b) は外来語、(16c) は悪い意味を持つ語の例である。(16d) の容認可能性が低いのは、「くれる」に「くださる」という特定の言い換えがあるためである。(16e) に挙げられている「水泳する」という単語は以上のいずれにも当てはまらないが、慣例的に「お/ご - になる」などの形にならない。

またこの他にも、「お越しになる」「ご覧になる」のように慣習的に「お/ご - になる」の形で使われる語があり、これらにも敬語化の際の制限があるように見える。表 2 は、以上のような動詞の各敬語表現についてまとめたものである。

表 2 に見られるように、敬語化に制限のある動詞には、(i) 「お/ご - 」の形にはならないが「- れる」などの敬語にはできるもの、(ii) 敬語化できないもの、(iii) はじめから（「お越し」など）尊敬語幹の形となっているためにそれ意外の形にできないもの、の三種類があると考えられる。(i) のような動詞はその辞書の中で +O/+G の素性値がつかないことにすれば良い。(ii) は意味論の中の待遇の問題だと考えられる。(iii) のような単語は、以下のようにすることではじめから尊敬語幹とすれば良い。

(17) お越し $\vdash S_{\text{stem}} \quad \backslash NP_{ga} \backslash NP_{ni}$
 $+ \text{hn}$
 $: \lambda y \lambda x \lambda e. \text{sonkei}(\text{okoshi}(e, x, y))$

⁶命令の意味で「おくれ」は使われる。

終止形	お/ご-になる	お/ご-だ	お/ご-なさる	お/ご-する	-なさる	-れる
見る	-	-	-	-	見なさる	?見られる
来る	-	-	-	-	来なさる	来られる
スケッチする	-	-	-	-	スケッチなさる	スケッチされる
はらはらする	-	-	-	-	はらはらなさる	はらはらされる
失敗する	-	-	-	-	失敗なさる	失敗される
盗む	-	-	-	-	-	-
くれる	- ⁶	-	-	-	-	-
水泳する	-	-	-	-	水泳なさる	水泳される
お越しになる	お越しになる	お越しだ	お越しなさる	-	-	-
ご覧になる	ご覧になる	ご覧だ	ご覧なさる	-	-	-

表 2: 動詞と尊敬語表現の関係

5 意味論についての考察

尊敬語、丁寧語、丁寧語は(話者・聞き手の正体が判断可能かどうかに関わらず)上位・下位に置かれているものが一意に決まる。一方謙譲語は、大まかに分けて、 $-ガ-$ ヲ文ではヲ格名詞句、 $-ガ-$ ニヲ文では二格名詞句を上位に置くように見える。しかし以下で見られるように、上位とされるものが語によって異なる場合がある(菊池(1997)[5])。

- (18) 謙譲語の高める対象
- $S \setminus NP_{ga} \setminus NP_o$ でヲ格を高めるもの
例) 待つ: 先生をお待ちする。
 - $S \setminus NP_{ga} \setminus NP_{ni}$ で二格を高めるもの
例) 会う: 先生にお会いする。
 - $S \setminus NP_{ga} \setminus NP_{ni} \setminus NP_o$ で二格を高めるもの
例) 返す: 先生に本をお返すする。
 - $S \setminus NP_{ga} \setminus NP_{ni} \setminus NP_o$ でヲ格を高めるもの
例) 誘う: 演奏会に先生をお誘いする。
 - 「-から」を高めるもの
例) 預かる: お客様からごみをお預かりする。
 - 「-のために」を高めるもの
例) 作る: お客様のために料理をお作りする。
 - 「-と」を高めるもの
例) 別れる: 先生とお別れする。
 - 「-について」
例) 聞く: 先生についてお聞きする。

さらに語に複数の意味がある場合、その違いにも依存することができる。

- (19) a. 私がホールに 山田先生 をお送りする。
b. 私が 山田先生 にお歳暮をお送りする。

ここで「送る」という動詞が、(19a)では送迎、(19b)では贈呈の意で使われている。(19ab)共に高められているのは「山田先生」であるが、(19a)ではヲ格であり、(19b)では二格である。

(18)(19)に見られるように、謙譲語において動詞が二格を取りながら二格を高めないのは、二格が非人格的な物をとる場合であるように見える。更にヲ格も高

めないものは、ヲ格も非人格的なものをとる動詞であるように見える。よって、ヲ格・二格には、必須格/非必須格以上のより詳細な分類が必要なのだと考えられる。これについては、謙譲語の計算にあたりどこまで詳細に分類する必要があるのかも含め、今後の課題とする。

6 まとめと今後の課題

本稿では、主な敬語表現について、一部の特殊な例も含めて統語範疇を割り当て整理をした。また意味論に敬語の使用条件を加味するにあたり、格助詞の細分化の必要性があるという仮説をたてた。意味論の更なる分析が今後の課題となる。

参考文献

- 戸次大介, 川添愛, 片岡喜代子, 齊藤学: 「敬語の意味論」, 言語処理学会第14回年次大会発表論文集, pp.681-684, 東京大学(2008).
- 戸次大介: 「日本語文法の形式理論」, くろしお出版(2010).
- 文化審議会: 敬語の指針(答申), (http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/pdf/keigo_tousin.pdf)
- Steedman, M.J.: Surface Structure and Interpretation, The MIT Press(1996).
- 菊地康人: 「敬語」, 光文社学術文庫(1997).